

AV JOURNAL

1985年11月 第8号



〈3階新ビデオ自習室にて〉

目次

外国語学習と形式主義	附属図書館長 八木 浩	2
山末一夫委員の急逝を悼む	視聴覚教育委員会委員長 乙政 潤	4
1985年度L.L.授業時間割表 視聴覚教育施設及びL.L.資料の利用案内		5
モンゴル国立大学で日本語を教えて	モンゴル語学科 橋本 勝	6
映画(ビデオ)による語学教育顛末記	インドパキスタン語学科 溝上 富夫	7
〈L.L.便り〉 新着視聴覚資料について 映像資料(レーザー・ディスク)所蔵一覧		10
〈出版物案内〉		11
編集後記		11

大阪外国語大学

外国語学習と形式主義

附属図書館長 八木 浩

1.

なんのための外国語なんだ、ということは昔ながらのなつかしい問いである。ただ外国語を注ぎ込むだけならばくだらない、無内容なものならやらなくてもよい、という批判がそれである。しかしもしその批判が、ただそう言うだけで、外国語をよく学習し切れないままに終わってしまうなら、また自ら形式主義になりさがらざるをえないだろう。教える方にとってこのことは一層深刻である。というのも、どんなに内容を強調してみても、それでは外国語大学での外国語学習を形式的にとらえているので、やはり形式主義になるからである。

われわれの大学では、もちろん、もっとわかりやすい形式主義もあとをたたない。新入生をめぐる討論会に参加してみたところ、何人かの学生が軽くこう主張したのである——わたしは〇〇語を使うようになりたいからこの大学にやってきたのだ、大学とか研究とか、文化の研究とか、そんなことについては関心がないんだ、もちろん大学でなくてもよいが、大学生の資格をとれといわれるもんだから、大学に入ったまでのことだ……こんなにはきはきと形式だけを主張する例は珍しい。たいていはそういえないままに、より低い現実感覚に流され、無内容な形式主義語学学習になってしまっているのである。

こういう2つの考えにはさまれたままになって、あちらにもこちらにも顔を向けているだけでは進歩するはずがない。だいたい外国語教育には進歩不能というべき限界がつきまとう。いい学生がくると教育の実もあがるが、やりたくない学生が多いとなかなかである。進歩は、毎年入ってくる学生が相手である以上、始めからきわめて相対的なのである。たしかに研究と教育とはこの点で違いがあるので、研究者は語学教育を放棄してまで、研究一筋に進みだがる気持が強くなるかもしれない。そうなるともはや学問を自分の好みからやっている、学生を土台にしている、欲望のとりこに近いところがあるといえ

るかもしれない。もはや公共機関で教育している者としての根拠がないのである。

2.

外国語の実力は年とともに増大するかといえば、そうはいかない。60才も近くなると、のび悩む。世阿彌は44、45才ならもう手のこんだまねをするな、「何としてもよそ目花なし」、つまり人の目に魅力がない、という。しかし「もしこのころまで失せざらん花こそ眞の花にてはあるべけれ」といい、40以前に天下の名望を得た者のみが、50になっても「失せざらん花を持つ」ともいっている。50以上になると「せぬならでは手立あるまじ」、つまり何もしないというやり方以外には適当な方法はあるまい、だが本当の奥義を体得している人は、見所は少くとも「花は残るべし」という。

これは能の役者論だが、わたしたちにも暗示多いことばである。幸いにも能の上演と外国語のマスターは別のことだ。外国語はそんな大きな身体行動ではなく、口と頭とを結ぶ最少の面積のできごとなのだ。だからこれは50才でも60才でもまだ進歩の余地がある。外国語の「風姿花伝」は能と同じ厳しさを要求しているにしても、まだ老いて努力の余地が残されている。少くともそう考えない人の方が形式主義的だろう。年とればだめという形式主義に反抗し、50、60でも花を咲かせられないか、探究すべきだろう。

幸いなことに視聴覚教室も通訳訓練室もある。自分の老体を、脳細胞を、批判してみることも可能だ。脳の老化は計算しそこね、やりすぎややらなすぎにちがいない。ゲーテは老化せぬとは仕事することと定義した。計算のしそこねを排除するのはそうむづかしくはない。そういう点からも器機を用い、自然を支配するのが外国語学習の正道にちがいない。そう思って60に近いばくは30才も若い先生方と一緒に並んで一年も通訳訓練をやりつづけたが、たいへん

成果があった。もっと続けたいが、なかなかみんながそろってやる気にならないので休止している。若い先生方がいつまでもやろうとしないのにはまたわけがある。これも過ぎればまた形式主義だから。

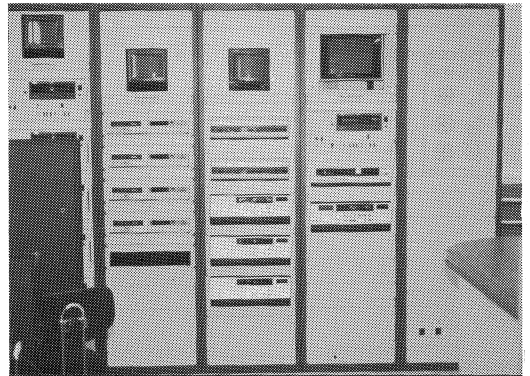
3.

ヨハン・ゴットフリート・ヘルダーは200年も昔にいった：「話すということは、考えることを学ぶことである。それはまた物語ることを学ぶことである。話すということは、つまり、感動することを学ぶことである。」この外国語学習論に魅せられ、エルフルト大学の教科書に感心し、立体的で内容的な教材にぶつかりつつ授業しようと思った。しかし結局自分で内容をつくりだし、自分の語学力で立ち向う勇気がないとうまくいかないことが半年のうちにわかってきた。というのも言語コミュニケーション活動は、歴史・社会諸関係のもとに、主・客の媒介によってアクティブに行われる。そこにつらぬかれる目標への粘り強い努力と戦術とたたかいがないと空疎になるだろう。集団の中で、方法を用いて、一体どういう風にして行いうるか？ 日本とドイツの現実の総体と学問の領域といかに結合して外国語を学んでいくか。つまり外国語教育は一科学領域に立った全人教育でなくてはなるまい。

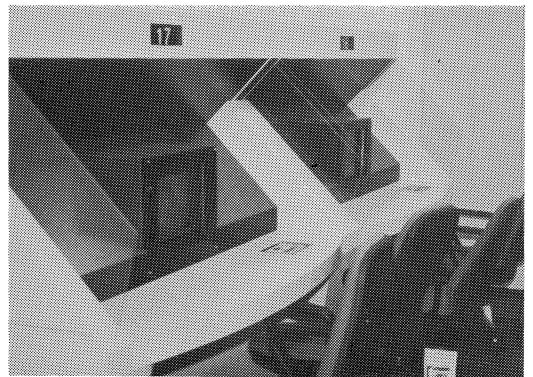
国立大学協会の第一常置委員会は語学教育について、このような現実の総体に立ちむかう全人教育的語学を排除し、語学教育の形式主義路線を直進せんとするものである。文学専門家がすぎる、語学教育者を増加させよ、という考えをこの夏の報告にするし、¹⁾また、臨教審第4部会の答申にこたえ、インテンシブメソッド、L.L.を中心にやれ、文学・語学の専門家ではまずい、社会・人文の専門家にもやらせろなどなど、形式論をばらばらにのべるのみである。²⁾

臨教審であれ、国大協であれ、もっともっと真剣に外国語教育の条件を形成する部分と魂をなす部分を弁証法的に、深く追究すべきであろう。定員や器械の充実にすべてをつくすべきだし、核兵器に覆われ、自然破壊が迫行し、自由と魂がむしばまれていく現実を批判し、国際的な友好・平和に思いを寄せる人類愛に根ざした外国語教育について意見をまとめるべきだろう。そういう主張のない自由や個性や国際性はわかりにくいものであり、外国語の方法についていえば形式主義に通じかねないであろう。

国大協も臨教審も今日たいの語学教師がヘルダーの次の言葉をかみしめていることを知り、例の、昔ながらの「役立つ外国語」教育批判をやめるべきである：「言葉は文法からでなく、生きたまま学ばれなくてはならない。目のため、目を通し研究されるのでなく、耳のため、耳を通し語られねばならない。……話すことから文体を学ぶのであって、巧妙な文体から話すことを学ぶのではない。自然から情熱の言葉を学ぶのであって、芸術から自然を学ぶのではない。」



〈4階テープライブラリーのビデオ送出装置〉



〈3階ビデオ自習ブース〉

4.

ここまでくるともう少しいっておきたいことをつけ加えざるをえない。

国際性を云々するのなら、なぜ日本の中学校の英語教育の授業時間を減らせてきたかにも思いをいたすべきではなからうか。中学校の英語教育は昭和22年新制中学発足当時は週5～6時間、26年には4～6時間、47年には4時間、56年には3時間に減少した。外国では小学校から外国語を始めている。東独の例を示すと、5年生で6、6年生で5時間のロシア語があり、7、8、9、10年生の4年間は第一外国語3、第二外国語3時間となっている。オーストラリアにしてみるとインドネシア、中国、日本語などがずいぶん学ばれている。なぜ日本の高校は多くの外国語を自由に選べる指導要綱に反し、英語ばかりやっているのだろう。例えばドイツ語をさきにやる方が英語がうまくできるにちがいない。あるいは朝鮮語、中国語、ロシア語、インドネシア語などをさきにやる方が国際的精神にかなっているだろう。なぜもっとそういうことに国の予算が出せないのだろうか。結局役に立つとか、アメリカ式とか、安あがりとか、既得権とかいうことにすぎないのではないか。これが最悪の形式主義なのである。

大学の語学で、なぜ英語が第二外国語であっていけないのか。外国人教授の給与でも、そう高いわけ

ではない。交渉に入ると西欧の人は顔をしかめるのである。とくに今年から突如外国人非常勤講師手当が日本人なりに激減したことは、憤激を呼んでいるが、小数のかたがたなので押し切られている。逆に日本人の方を引き上げるべきだ、と考えない人がいるだろうか。軍事費の引き上げばかりみているので、本当に困ったことだと思う。

臨教審のいう個性、自由、国際性ということからすると、こういうことについて反省するのがいちばんたいせつだろう。大学の教養学の要石である外国語教育をきりはなし、外国語センターにうつす試みがなされて久しいが、そのこと自身、もう一度ふりかえてみる必要もある。文化・文学・言語から切りはなし、教養の全体から切りはなし、どのような成果がみられたか。外国語学の形式主義が進んだだけといわれる面もある。第二外国語は急激に弱体化してきた。中級などものにならなくなり始めた。もちろん全国の外国語教師に課せられた課題なのでもあるから、一方的に他のせいにもできないので、このさいわれわれも大いに反省しなくてはなるまい。こつこつと自分のすきなことをやって自分だけを救うというような時ではない。

1) 『国大協 大学の在り方について』中間報告 昭和60年6月 17頁、29頁

2) 『文教連報』3933号 昭和60年7月19日

山末委員の急逝を悼む

視聴覚教育委員会委員長 乙 政 潤

山末さんは視聴覚教育委員会のメンバーであった。本学の視聴覚教育を考えるために視聴覚教育委員会が成立したのは昭和54年のことである。委員会は各語学科のL.L.担当教官で構成されていたが、山末さんは「特別委員」であった。

それは、委員会が成立する以前から、「大学教育方法等改善経費」が配賦されるたびに、その一部で市販の少数言語教材を購入するについて、いつも指導と助言を仰いでいたことに由来する。

山末さんと一緒に仕事をした者は誰でも感じていることだが、山末さんは自分の仕事に忠実な人であ

った。視聴覚教育委員会の仕事でも、山末さんはたちまちこの特性を発揮し、本学のテープ・ライブラリーの少数言語教材を充実することに情熱を傾けられた。たんに出来合いの教材を購入するだけに止らず、私たちの手で作って行くことを提案されたのは山末さんである。『トルコ語教本』（昭和58年完成）はこうして山末さんの推進によって出来上った。市販の少数言語教材も、山末さんが敷いておかれたレールに乗って、僅かずつながら毎年ふえて行っている。

これらは、山末さんの本学に対する寄与——本来ならもっともっと大きいはずだった——の一つである。

1985年度 LL授業時間割表

	教室	I	II	III	IV	V	1	2
		9:00~10:40	10:50~12:20	13:10~14:40	14:50~16:20	16:30~18:00	18:20~19:40	19:50~21:10
月 MON	4-I	It1 マッラ	P2 ラジャブ	Swe1 クリスチャンソン	E2A スターク	C1B 青野	F 小沢	C 上神
	4-II	R1B 道上	Pi2 ルムベラ	Pi1 津田	R1A 生田		R 生田	D 時田
	5-I		It2 マッラ	S1 アルバレス		F2 三藤		
	5-II	F2 ボロー	F3A ボロー	Dm3・4 福居	S アルバレス	R 桜井	E 正木	
	V.R.	H2 溝上	K4 金	K1,2 金				
火 TUE	4-I	Pi2 ルムベラ	Pi2 津田	E2B スターク				
	4-II	U1 タバッサム		M2 荒井				
	5-I	B1 南田	B2 南田	E1A 舟阪	F1 大木			
	5-II		F3,4 大木	F2A ボロー	F3B ボロー	F4 ボロー		
	V.R.		K 金		K3 金			
水 WED	4-I	E 深山	V1 富田	S3 アルバレス	C 上神	E 加藤		D 野村
	4-II			P1 ラジャブ	D1 高田	St 山本		S 堀内
	5-I		S2 アルバレス	E1B 舟阪	Dm2 アナセン			
	5-II	St 山本	It1 郡		It1 郡	It3,4 郡	It 郡	E 正木
	V.R.			C3・4 杉村		Pi 津田		
木 THU	4-I	A3,4 イサム	V2 富田		In1 アイブ	C1A 中山		
	4-II		H1 マーラビア		K1 李	In2 アイブ		
	5-I		Dm3・4 アナセン		Dm1 アナセン			
	5-II		B3,4 エーペ					
	V.R.		C 杉村					
金 FRI	4-I	D2 乙政	E3 船山	C2A 上神	C2B 上神		E ドランス	E ドランス
	4-II	PB2 河野	PB1 東	D1 友田			E 田路	F 小西
	5-I			K2 奥田				
	5-II	F1B ボロー	F1A ボロー					
	V.R.						C5 大河内	

視聴覚教育施設及びL.L.資料の利用案内 (但し学生のみ)

- 1) 視聴覚教育施設の学生利用部分は
 - 3階 ビデオルーム、個別ビデオブース
 - 4階 テープライブラリー、視聴覚教室
 - 5階 L.L.自習室、L.L.教室5-I、5-IIでありL.L.資料とは本学附属図書館、視聴覚資料係で所蔵する視聴覚資料をいう。
 - 2) L.L.資料の利用は上記のL.L.施設内においてのみとし、館外貸出は一切行わない。ただし原則として私資料の利用は許可しない。

利用を希望する資料については所定の用紙に記入し、カウンターに学生証と共に提出すること。

※返却時にすべての資料は巻き戻しをすること。
- a) 個人利用の場合
 - ※テープ テープの個人利用はテープライブラリー及びL.L.自習室とする。
 - ※ビデオ ビデオの個人利用(3人まで)はビデオ自習ブースとする。
 - b) グループ使用の場合
 - L.L.資料のグループ使用については以下のL.L.自習室及び教室において行う。ただし教室、ビデオルームについてはあらかじめ許可を得た場合とする。
 - ※テープ及びレコード
 - ・5-I教室(25人まで) (次頁につづく)

- ・視聴覚教室 (26人以上176人まで)
 - ※ビデオ (但し4人以上)
 - ・ビデオ自習室 (U-matic3/4インチのみ 10人まで)
 - ・ビデオルーム (全機種 11人以上32人まで)
 - ・5-II教室 (国内機種のみ 32人まで)
- 3) 前記のグループ使用及び私資料 (但し許可しない場合がある) 利用についてはL.L.開館時間内においてのみ許可するので一週間以前に所定の申し

込み書を提出すること。ただし同一時間帯の連続使用は場合によっては許可しないことがある。

- 4) 利用時間は 月・水・金 9:30~19:45
火・木 9:30~16:45
- 5) 施設内において飲食、喫煙その他室内を汚す行為等は厳禁する。
- 6) テープのダビングは著作権法上、一切禁止する。
- 7) その他の施設利用、機器使用については視聴覚資料係までどうぞ。

モンゴル国立大学で日本語を教えて

モンゴル語学科 橋本 勝

モンゴル人民共和国 (以下モンゴル) の首都ウランバートル市にあるモンゴル国立大学 (ウランバートル大学) で昨年10月中旬より丁度一年間、日本語教育とモンゴル語学研究に携わり本年10月半ばにその任を終え帰国したところである。筆者にとって此度は、四度目のモンゴル訪問であったが、当大学での在勤は1978年~1979年の一年間に次いで二度目である。モンゴルに於ける日本語教育機関は、唯一このモンゴル国立大学 (5年制) のみでありその果す役割は、非常に重要である。1975年に当大学に日本語講座が開設されて早、今年で十年が過ぎ去った。文学部モンゴル語・文学科学生の中から毎年5名内外の者が日本語を選択し第3学年より第5学年まで三年間、学習する。週に20時間、年に30週の授業が行なわれる。彼らは、モンゴル語・文学の勉強に加えて学習するわけで一般に日本の大学に比べて格段に授業時間数が多く相当に負担も多い。学科目は、殆んど必修であり個人の選択の余地はない。学生は、概して真面目で素朴である。故意に授業を休むこともないようだ。落第も許されないので何処かの大学のように留年を長々と続ける学生はいない。日本語クラスは、少人数なので学生との文字通り対面授業であり語学教育としても理想的と言える。出身地もウランバートルだけでなくモンゴルの各地方より集っており色々な方言に接することも出来る。

視聴覚機器類の設置は、不十分ではあるが、既に英国、東ドイツよりそれぞれ供与されたL.L.教室が

設けられている。又、今年10月初旬に日本より無償供与による最新のL.L.装置器材が当大学に届き、本年中には設置が完了することになっている。モンゴ



写真：モンゴル国立大学本館前で
(日本語クラスの学生たち)

ル国立大学に於ける日本語（外国語）教育に多大な便宜を与えることであろう。今年の卒業生（7月卒）がその恩恵に浴さなかったことを悔んでいた。モンゴルの視聴覚教育も一つの節目を迎えたようである。

今後、視聴覚教材の開発が促進されモンゴルに於ける日本語教育の更なる進展が期待される。

(1985・11・5)

映画(ビデオ)による語学教育顛末記^{てんまつ}

インド・パキスタン語学科 溝上 富夫

「一年間初級をやっただけで、ヒンディー語映画のシナリオが、辞書を頼りにともかくも読めるとは、ヒンディー語は何と有難い言葉だろう。アラビア語やロシア語のような難しい言葉では考えられないことだ」と学生に言うのが私の口癖である。実際その通りで、(ヒンディー語の学生は外大生平均よりはよく勉強するとはいえ)、二年生の語学実習に映画を觀賞しているといえ、しばしば他語科の教官の驚嘆の声を聞く。

三年前に初めて映画をカリキュラムに導入した理由は、その頃からインド映画のビデオが安く(洋面の約 $\frac{1}{3}$ ~ $\frac{1}{4}$)市販されるようになったことや、私自身映画が嫌いでないことにもよるが、一番大きな理由はやはり、学生に語学に対する興味をもたせる方法をいろいろ考えていたことだ。

映像はもっとも感性を刺激するものであることは、心理学専攻でなくても知っていた。だからこそ、テレビの俗悪番組は子供に悪い影響を及ぼす反面、良い番組なら、すばらしい教育的効果を発揮するものである。しかし、シルクロード・ブームはあるとはいえ、何といても映像でインドと接触できる機会ははまだひじょうに少ない。世界一の製作本数を誇るインドの映画も、一般の劇場で上映されることはほとんどなく、テレビでも、これまでNHKでわずか二本放映されただけである。このように、インドの映像にいわば「飢えている」ときに、インド映画のビデオがホンコンの代理店を通じて大量に市販されるようになったのは、この上なくラッキーなことだった。さっそく飛びついて求めたのはいうまでもない。学生時代、初めてインド映画を観たときの感激を思い出した。その頃は、外大のキャンパス内でも、なかなか生の美しいヒンディー語に接する機会は

ないような状況だったので、画面から飛び出す俳優のセリフは、意味は聴きとれなくても、猛烈な迫力をもって私に迫ってきた。言葉が「生きている」ことを知って感激したのはこのときだった。それからまもなくインドの大学に留学したが、この間、大体毎週一度は映画を観ていたから、百本以上のインド映画を観たことになろうか。映画のセリフを通して覚えたイディオムは多い。インド人特有のゼスチャーや表情も覚えた。文章の抑揚もマスターした。ヒンディー語を母語としない俳優が出てくると、発音からそのことを当てることができるまでになった。美しい女優が出てくると、若かった私の心はときめいたものだ。インド映画は、私の語学力向上に測り知れない貢献をしてくれただけでなく、私の青春の思い出の貴重な一コマともなっているのである。このような私自身の体験から、映画の語学教育への効用は疑いの余地はなく、映像を通して学生がインドに興味をもつであろうことも十分期待できたので、



〈ビデオ・ルームでの授業〉

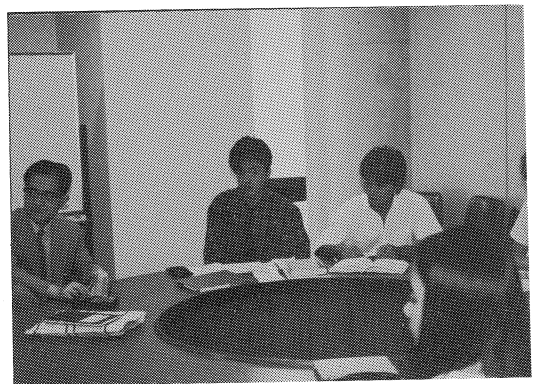
迷うことなく、映画を授業に導入することに決めたわけである。

ホンコンからとり寄せたインド映画のカタログを初めて見たときは、思わず目を見張った。あるわ、あるわ、インドで観たなつかしいあの映画、この映画……インドでも観るチャンスがなかった往年の名作の数々……その数ざっと七百本！ こんなのが、インドへ行かなくても、劇場へ足を運ばなくても、茶の間で観れるなんて！ 私は私より二十年も遅れて生まれてきた学生達を心から羨やんだ。

ところが、七百本ものビデオがありながら、選択に当っては、よりどりみどりというわけにはいかなかった。予算の制約もあったが、それよりもシナリオの入手が難しいのがその理由だった。私が一人で楽しむためならシナリオは要らないが、教室で教材として使うためには、やはりシナリオがあった方がよい。まだ二年生の学力では、セリフを聴いただけでは理解できないし、予習はぜひ必要だ。私に時間的余裕があれば、私が聴きとって手書きする方法も可能ではあるが、それは大変な労力だから、市販のシナリオがあれば、それを活用するのに越したことはない。10本前後の映画のシナリオが市販されていることが分かったので、とりあえず、それらの映画から始めることにした。従って、楽しむことを第一として選ぶインド人の選択基準とは^ず必ずから異なった選択となった。しかし、語学教育という点からすれば、映画の内容がどんなにつまらなくとも、外国人の我我には無駄ということは決してない。むしろ、逆に、名作といわれる映画ならどうしてもそのストーリーの展開、俳優の演技に心が奪われてしまって、肝心のセリフに余り注目しなくなるということさえあるが、陳腐で退屈な映画の方がゆっくりセリフが味わえるという面もあるのである。しかし、こうして集めた約10本の映画には、娯楽作品もあり、社会派の作品もあり、評判の名作もありで、結構バラエティーに富んでいた。ビデオカセットはPal方式がほとんどだったので、視聴覚係の人にお願ひして、Pal用のビデオデッキを買ってもらった。

アジアの言語教育に映画を活用するということが珍しがられたためか、授業を開始して一ヶ月余り後、NHK国際局からの取材を受け、その授業の様子は「映画でヒンディー語を学ぶ若者達」と題して南アジア向けの国際放送とラジオの第二放送でも放送され

た。NHKの記者には学生達の真剣な態度が大変印象的だったらしい。確かに、この授業では誰もいねむりをする者はいない。およそ、次のような方法で授業をすすめている。まず、学生にシナリオをあらかじめ読んで来させる。一般の講読の授業と同じように訳をさせて訂正する。インドの文化的背景も説明する。シーンの一定の区切りのところまで来たら、初めから映画を二回見る。そして、さらに役割を決めて俳優のセリフを反覆させる。しかし、こういうやり方では、通常三時間もあるインドの映画を見終わることはできない。年間授業数約28コマとして、一年間に二本（娯楽作品と芸術作品の組み合わせ）は見せたいと思うので、いきおいセリフの反覆練習は割愛しがちとなる。時間的制約もあって、なかなか、セリフを丸暗記してしゃべるところまではいかないのが残念である。多くの学生にとっては、「読む」「聴く」で終わってしまう。しかし、それでも書きとりの試験をすると出来は悪い。ヒンディー語は日本人にとって「聴きとりやすい」言語だと思うが、やはり20歳ともなると耳は悪くなるのか、それともそれまでの学校教育の弊害で耳の訓練ができていないためだろうか。おそらく後者だろう。同じ映画を二度使うことはなかったが、四年目にもなると、そろそろマンネリ化してきたキライはある。要領のいい学生は予習の手抜きをする。分量的には、他の文学書の予習よりは楽なのである。やはり、どんなに工夫された授業でも、学生の積極的な参加がなければ効果はあがらないという普遍的真理はここでも当てはまるのである。語学の問題を離れても、学生の好奇心は今一つという感じはする。シラケているの



である。例えば、ヒロインが涙を浮かべて迫真の演技をする、インドだったら観客の中からすすり泣きが聞こえてくる場面だが、ヘラヘラ笑っている者がいる。確かにストーリーは幼稚で、我々からみると、ヒロインの嘆きがもう一つよく分らなかつたり、演技がオーバーでわざとらしくあつたりすることはある。しかし、インドの映画を日本人的又は西欧人的視点でのみ観るのはまちがいである。余りにも現実離れた場面は確かに多いが、それを日本の現実とちがうと笑うのは当を得ていない。笑うのはインドの現実を知ってからにすべきである。悲しい場面ではヒロインと一緒に泣くことのできるナイーブでみずみずしい心を持ったインドの方が、シラけた日本人学生より幸せではなからうかと思つたりもする。

しかし、映画を使った語学的教育には、やはり利点の方が多い。まず、講読(=訳読)に偏りがちの従来の語学教育の欠陥を補う点で大変有効的である。映画のセリフは割に実際の会話体に近い。ヒンディーの映画のセリフは「ボンベイ風ヒンディー」であつて標準ヒンディーではないという一部ヒンディー純粋主義者の指摘はあるが、そうであれば、なおのこと一般のインド人大衆の話す言葉に近いともいえるのである。これに慣れると小説中の会話文も楽に読めるようになるから、結局、映画の授業は講読の授業にも利するところが大きい。インド社会に特有のカーストの問題や日常生活におけるいろいろなタブーも、映像に描かれることが多い。それに、結婚式の場面などは、これ以上にふさわしい文化紹介の手段はないと思われる程である。「ヒンディー映画はインド文化を表現していない」という一部インド人インテリに対しても私は反論をもっている。そういう一面はあるにしても、それではその文化は外国文化かというて決してそうではない。こういうインテリの指摘は「ニューデリーの高級住宅街はインドではない」というのによく似ている。よく見ると、やはり、それはインドの一部であることは明白なのである。とにかく、映画はその国の文化を紹介する有効な手段であることだ。先ほどのシラけた学生の例も、教師にとっては、今はやりの「異文化間コミュニケーション」について考えさせてくれる点で有益なのである。そして、最大の利点は、かなりの学生がこの授業によって、ヒンディー語への興味

とインドへの関心を持つようになったという点である。ある学生は、この授業を「ヒンディー砂漠のオアシス」(!)とまで言った。願わくばこれを機に、君自身の努力によって、「砂漠」の緑化をはかられんことを。



〈L.L.便り〉 新着視聴覚資料について

1982年、イギリスの「サイト&サウンド」誌で世界の映画関係者によって選出された、世界映画史上におけるベストテン監督によれば、5位ルイス・ブニュエル、黒澤明(同点)、9位ジャン・リュック・ゴダールという人々の名前を見出すことができます。同じく作品部門のベスト・テンには、7位「情事」(ミケランジェロ・アントニオーニ監督)、その他の作品が選出されています。(その他の選出監督、あるいは作品は想像してみてください)さらに古く、先のごダールやフランソワ・トリュフォー等、のちのフランス・ヌーベルバーグを担った監督達が映画製作に進出する以前、その評論活動によって参加していたことでも知られる「カイエ・ド・シネマ」誌が、1958年に選出した世界映画史上ベストテン監督には、3位にロベルト・ロッセリーニが選出されています。

ところで、以下に掲げるリストは、今年(1985年)1月17日の視聴覚教育委員会で、L.L.に所蔵する視

聴覚資料の拡充を図るため新しいソフトとして、レーザー・ディスクを購入していくことを決定した確認に基き、ちょうど3月末の3階ビデオ自習ブースの新設に合わせるかたちで購入した映像資料を網羅したものです。映画資料の中には、先に挙げた監督のいくつかの作品を見出すことができるでしょう。

語学資料を主とすべきL.L.の性質上、無限定に映画資料等の購入が許されているわけではありませんが、それでも世界の現代文化史上に映画の占める度は軽視できないものとしてあるでしょう。なるべく各言語にわたって購入したいと考えているものの、なにぶんまだタイトル数も少ないので、言語によってはないものもあり、玉石混交のきらいもあるかもわかりませんが(それもまた利用者が自分で判断して下さい)、その他の音楽資料等もふくめて、利用者の語学、あるいは文化資料として活用されんことを希望します。

映像資料(レーザー・ディスク)所蔵一覧

(1985年11月現在)

資	料	名	所要時間	数量	
NHK	名曲アルバム	-ヨーロッパ編-	1-4	4	760.8 N (LD) X-1-4
"	"	-日本編-	1	1	760.8 N (LD) X-5
The complete Beatles		(コンプリート・ビートルズ)	119分	1	V767.8 C (LD) E-129
Sunflower (ひまわり)		(日本語字幕)	107分	1	V933 S (LD) E-130
The big red one (最前線物語)		(")	113分	1	V933 B (LD) E-131
2001: a space odyssey (2001年宇宙の旅)		(")	139分	2	V933 S (LD) E-132
Cat on a hot tin roof (熱いトタン屋根の猫)		(")	108分	1	V933 C (LD) E-133
Henry V, directed by L. Olivier.		(ヘンリー五世)	2'16分	2	V932 H (LD) E-145
The Never ending story.		(ネバーエンディングストーリー)	1'35分	1	V933 N (LD) E-146
The Rolling Stones/Let's spend the night together		(ザ・ローリング・ストーンズ)	1'31分	1	V767.8 R (LD) E-147
Fitzcarraldo (フィツカラルド)		(日本語字幕)	157分	2	943 F (LD) D-4
Der Kongress tanzt (会議は踊る)		(")	84分	1	V943 K (LD) D-5
Die Blechtrommel. (ブリキの太鼓)		(")	2'22分	2	V943 B (LD) D-8
Strauss, J./Die Fledermaus. (こうもり)		(")	2'58分	2	V766 S (LD) D-9

Un amour de Swann (スワンの恋)	(")	111分	1	953 A (LD) F-25
Belle de jour (昼顔)	(")	100分	1	953 B (LD) F-26
Vivre sa vie (女と男のいる舗道)	(")	83分	1	953 V (LD) F-27
Hecate (へカテ)	(")	108分	1	V953 H (LD) F-28
Therse Raquin. (嘆きのテレーズ)	(")	1'46分	1	V953 T (LD) F-35
Les Palapluies de Cherbourg. (シェルブールの雨がさ)	(日本語字幕)	1'31分	1	V766.7 P (LD) F-36
Montand (Yves) international. (イブ・モンタン・ワールド・ツアー)	(")	1'31分	1	V767.8 M (LD) F-37
Offenbach, J./Les Contes d'Hoffmann. (ホフマン物語)	(日本語字幕)	2'39分	2	V766 O (LD) F-38
Carmen (カルメン)	(")	101分	1	V963 C (LD) S-3
Camilo Sesto/De Madrid con amor. (カミロ・セスト/マドリッドより愛をこめて)			1	V767.8 C (LD) S-4
Paisa (戦火のかなた)	(日本語字幕)	119分	1	V973 P (LD) It-4
Un Maledetto Imbroglia (刑事)	(")	114分	1	V973 M (LD) It-5
L'avventura (情事)	(")	137分	2	V973 A (LD) It-6
Miracolo a Milano. (ミラノの奇せき)	(")	1'36分	1	V973 M (LD) It-9
Il Ferroviere. (鉄道員)	(")	1'55分	1	V973 F (LD) It-10
Verdi, G./Falstaff. (ファルスタッフ)	(")	2'19分	2	V766 V (LD) It-11
Dersu Uzala (デルス・ウザーラ)	(")	141分	2	V983 D (LD) R-6
Pociag (夜行列車)	(")	97分	1	V989.8 P (LD) Po-2
Kanal (地下水道)	(")	96分	1	V989.8 K (LD) Po-3
Cién. (影)	(")	1'34分	1	V989.8 C (LD) Po-4
Czlowiek z zelala. (鉄の男)	(")	2'33分	1	V989.8 C (LD) Po-5

〈出版物案内〉

1985年3月以後に出版された、語学テキスト(スライド、ビデオテープor録音テープ付)、目録、論集等は以下の通りです。これらの出版物は「大学教育方法改善」「視聴覚教材開発」等のプロジェクトによるものです。

- 視聴覚外国語教育研究 第8号

4コママンガの言語テキスト化	乙政 潤	ルーマニア紀行(その1)	伊藤 太吾
笑い声の音響的性質	郡 史郎	• スライド目録	北インドを中心とする服飾、装飾— インド・パキスタン語学科
同時通訳の諸側面	船山 伸他	• ビルマ語入門	発音編・文字編 南田みどり

||||||| 編 集 後 記 |||||

◇AV ジャーナル第8号をお届けします。3階ビデオ自習室が新設されてから、テープライブラリーの利用が、オーディオよりもビデオの方が、はるかに多くなっているようです。今回、映像(レーザー・ディスク)の目録を掲せました。

◇今年度の語劇のビデオ撮影は、モンゴル語、ペルシャ語、ドイツ語、フランス語の4学科だけでした。
◇次号の発行は3月を予定しています。多くの方々の寄稿・ご意見をお寄せ下さい。

(H. K.)

A V Journal 一第8号一

1985年11月29日発行

編集 大阪外国語大学視聴覚教育委員会
附属図書館視聴覚資料係
発行 大阪外国語大学
印刷 株式会社印刷